私の履歴書

谷口吉生 ㉑

法隆寺宝物館

保存と公開 2つの使命

展示ケース設計し見やすく

上野の東京国立博物館にはそれぞれの時代と深くかかわる建築が立つ。

正門から向かって左側、1909年開館の表慶館は片山東熊の設計で明治期における洋風建築の代表作だ。38年に開館した正面の本館は渡辺仁の設計、洋風に和風の屋根をのせた「帝冠様式」の典型。その右側、68年開館の東洋館は私の父、谷口吉郎の設計でモダニズムの手法により現代の日本建築を追求した。そして私が設計し、99年に開館した「法隆寺宝物館」は、表慶館の後方に父の東洋館と向かい合うように立っている。

10者を指名して行われた旧建設省の「プロポーザル」方式と呼ばれる選考で、私はこの建築の設計者に選ばれた。「プロポーザル」は数枚の紙面にまとめた提案書の審査とインタビューを経て「設計者」を選ぶ方法で、「設計案」を選ぶ「コンペティション（設計競技）」とは異なる。

明治期に奈良の法隆寺から皇室に献納され、現在は国が管理する仏像、絵画、工芸品など約300件。日本が誇る唯一無二の宝物を収蔵・展示する法隆寺宝物館の設計には、高度な機能性と国の建築としての品位が求められた。私は設計にあたり、文化財を守りながら公開することの意味を徹底して考え抜いた。

文化財の保存で温湿度や光による劣化や虫害を防ぐことは最重要な課題だ。しかし、頑丈な収蔵庫の奥深くにしまい込むだけで、文化財は守れない。歴史を振り返れば多くの美術品が戦争や革命、廃仏毀釈といった人的要因で失われている。後世に残すべき人類共有の財産という認識を皆が持つためには、文化財を公開してその存在と価値を知ってもらわねばならない。

永久保存と公開展示。一見対立する2つの使命に応えるため、展示室と収蔵庫を石とコンクリートで囲われた部分に配し、その外側をガラスの開放的な空間で覆うことにした。展示室内には、作品が見やすい展示ケースを新たに設計した。48体の金銅仏は1体ずつ個別の台に置き、全面ガラス張りのケースに入れてある。ケースの存在を感じることなく展示物が身近に鑑賞できる。

「法隆寺宝物館」（北嶋俊治撮影）

荘厳な空間で日本の古美術と向き合った観客が展示室を出ると、そこは光あふれるロビーやカフェなどのスペースだ。ガラス面を通して前庭の池の水や青々とした木々が眺められ、来館者を過去から生命力あふれる現代に連れ戻してくれる。展示物を守るための空間と人が憩うための空間を組み合わせて融合させた。

外壁には「ジュラ・イエロー」という暖色系の石灰岩を使用した。花こう岩は耐久性は優れるが、どうしても冷たく重い感じになる。そこで探し当てたのがこのドイツ産の硬い石灰岩。新しい素材を建築に取り入れる時、私は石切り場などにも積極的に足を運ぶ。

東京国立博物館は2007年に運営主体が独立行政法人に変わり、官民あげて博物館を支える方策が議論されていた。そこで、ロビーを民間主催のパーティーなどに貸し出せないかと提案した。博物館をより身近に感じてもらうためだ。

手はじめにおよそ100人を招いて開いたディナーパーティーは成功を収め、国立博物館はその後もこうした催しが好評を得ているようである。

（建築家）

私の履歴書

谷口吉生 ㉒

NY近代美術館

設計コンペ 挑戦を決意

先輩や妻から熱心な励まし

MoMA（モマ）の愛称で呼ばれるニューヨーク近代美術館は1990年代、ある決断に迫られた。20世紀美術の殿堂として封印するのか、それとも現代美術の収集を拡大し続けるのか。数年がかりの議論の末、後者を選択して大規模な増改築計画を発表。97年、世界から10人の建築家を招いて設計コンペを開く決断が建築界の話題をさらった。

MoMAの学芸員が丸亀市猪熊弦一郎現代美術館を訪ねたことが機縁となり、私の元にもグレン・ラウリー館長からの招待状が届く。しかし私は当初、参加しないつもりだった。私の建築はコンペ向きではないし、参加した経験もない。都内のレストランで先輩や妻に熱心に勧められ参加を決めるのは、辞退の手紙を書き上げた日の晩のことだ。

挑戦する以上は綿密な作戦を立てよう。MoMAのアーカイブを調べ上げると、求められていることが見えてきた。当時、スペインのビルバオ・グッゲンハイム美術館などが奇抜な外観で世間の耳目を集めていた。しかしMoMAは自分たちのコレクションに揺るぎない自信と誇りを持つ。目新しい建築は不要だ。私は建築的な表現をできる限り抑制し、観客が美術品と出合うための理想的な環境づくりを設計方針に定めた。

第1次選考用にA3用紙ほどの大きさの緑色の箱が送られてきた。これに収まるものなら、何でも応募できるという。過去に設計した建築の写真や改修案のスケッチなどを箱に詰めて送ると、やがて選考結果が発表された。選ばれたのはスイス出身の建築家ヘルツォーク&ド・ムーロン、当時コロンビア大学建築学部教授のベルナール・チュミ、そして私の3組である。

第2次選考では設計条件を記した分厚い仕様書が手渡された。マンハッタンの複雑な建築法規にも対応しなければいけない。さらに審査委員である美術館の理事が私の建築を視察にくるたび、案内役も務めることになった。

米エスティ・ローダーの創業者の子息で理事長のロナルド・ローダー氏を迎えた時のことだ。各地の建築を案内し、夕方、帰京すると「2時間後に夕飯を食べよう」と言う。「あなたがどんな人と付き合い、どんな生活をしているのか知りたい。これは選考の一部だ」。悩んだ末、旧知のデザイナー、三宅一生氏に電話でお願いした。その晩、おいしい料理と三宅さんらとの会話を楽しんだジョーク好きのローダー氏は「ディナーは合格」と満足げに帰国した。

ニューヨーク・タイムズの日曜版の表紙に載った

世界の高名な建築家たちが相手だが、選考が進むにつれ手応えを感じた。美術館設計の経験が少ない彼らに比べると私はすでに多くの美術館を手掛けていた。最後の関門は実業家デイビッド・ロックフェラー氏、建築界の大御所フィリップ・ジョンソン氏らを相手にした3時間のインタビュー。その席でも、どうにか満足に答えることができた。

12月7日、結果発表を待つ私たち3組の建築家は早朝からダウンタウンの写真スタジオにいた。「当選したらニューヨーク・タイムズ日曜版の表紙に載る」。顔写真を撮るカメラマンの言葉で緊張が高まる。その日は「リメンバー」と米国人が胸に刻む日本軍による真珠湾攻撃の記念日だと私は気付いていた。日本人建築家は敬遠されるのではないか。そう心配したが、すべては杞憂に終わる。

（建築家）

私の履歴書

谷口吉生 ㉓

NY通い

「まるで予想外」の勝利

渡米30回超 7年越しの仕事

マンハッタン57丁目のホテルの一室で当選を知らせる電話を受けると、すぐにニューヨーク近代美術館（MoMA）に駆けつけた。マチスの「ダンス」という絵がかかる大きな展示室で、その日のうちに祝賀会が開かれた。当時ファーストレディーだったヒラリー・クリントンさんがいらして、スピーチ前の5分間で私自身の経歴などを、別室で簡潔に説明するよう頼まれた。その後の彼女のあいさつにびっくり。私のこともコンペについてもずっと以前から詳しく知っているかのような口ぶりなのだ。

次の日、世界各国の報道陣を前に、私はコンペに勝利したことを実感した。記者会見では何度も「なぜ勝ったと思うか」と問われた。前回記した通り、私は設計前にMoMAの歴史やコレクションに対する哲学を調べ上げていた。

1929年に開館した同館は近現代美術が専門。当時、同時代の前衛美術を収集するという方針は画期的なことだった。絵画・彫刻に建築、デザイン、写真などの部門を加えた美術館は、いまの現代美術館の原型だ。このような歴史を物語る既存の建築を尊重しつつ、新しい美術館の要望に率直に応えた提案が勝因だったと今も考えている。

「日本的な建築になるのか」とも聞かれ、「中央にセントラルパークがあるマンハッタンのように、大きな庭を囲む街のような建築になる」と返答。日曜日の新聞には私の顔写真とともに、「アンダードッグ」との見出しが躍った。勝利者は予想外の候補だったとの意味である。

私の事務所で働いていたハーバード大出身のブライアン・エイモス君に助けられつつ飛行機の中で米国の建築法規などを猛勉強し、ニューヨーク州の建築士の資格も取った。当初は単独で実施設計も行うつもりだったが、さまざまな制約もあり、MoMAの紹介で現地事務所「KPF」と協働することに。設計中に起きた9・11事件の影響などで、結果的に7年越しの仕事となった。渡米は30回を超え、57丁目の定宿から5番街を歩き、美術館に通った。

MoMAは歴史の中で増築を重ね、様式が異なる3つの建築で構成されていた。建築部門を持つMoMAだからこそ、これらを展示物として残して歴史を継承すべきだと考えた。グッドウィン&ストーンによる最初の建築（39年）、フィリップ・ジョンソンの東棟（64年）、シーザー・ペリの高層棟（84年）を可能な限り原形に近づけて保存。同館の活動の2本柱である「収集・展示」と「教育・普及」をそれぞれ担う新しい建築「展示棟」と「研究棟」を彫刻庭園の両端に象徴的に置く。

ヒラリー・クリントン氏（中央）と©2017Museum of Modern Art,New York/Scala,Florence

マンハッタンの魅力は古い教会や近代建築、摩天楼が混在する町並みだ。展示室を歩くにつれ外の景観が目に入り、ニューヨークで作品を鑑賞する感動を味わい、流れるような視覚体験ができる工夫もした。

2004年11月。新生MoMAの開館は9・11後の久々の明るい話題となる。美術館に入った私はロビーで開館を待つ数千人の来館者の拍手に迎えられた。その時の感激は今も忘れない。MoMAで働く人々の評価も心にしみた。この建築の中にいると色々な新しい発見がある」。あれから13年がたつが、理事の一人となった私が美術館を訪れるたび、そう声を掛けてもらえるのがうれしい。

（建築家）

私の履歴書

谷口吉生 ㉔

広島市中工場

機能 率直に見せる建築

丹下先生が描いた軸線通す

ニューヨーク近代美術館（MoMA）の増改築計画を終えた2004年、まるでタイプが異なる建築が国内に完成した。

広島市からの電話を受けた時には、美術館の設計でも依頼されるのかと思った。ところが来訪された広島市の担当者は、広島湾の埋め立て地の敷地をスライドで映し出し、こう話された。「公共建築の中で一番難しい建築を、ぜひ谷口さんにお願いしたい」。最新技術によるごみ焼却工場「広島市中工場」である。

引き受けることを決めた私は、いつものように国内外の既存施設を視察してまわった。そこで目にしたのは、ごみ焼却場であることを隠すための、劇場のような外観の建築や極彩色で覆った工場だ。いや、私たちの生活に不可欠な施設ならば、隠す必要はない。機能を率直に見せる建築を作ろうと思い立った。

運び込んだごみを分別し、効率よく焼却、煙や汚水、有害物質を除去するフィルターを設置した最新型装置の高さは約30㍍。巨大な機械は町中に置けば現代彫刻のようにも見えそうだ。そこから、工場内にガラスのトンネルを貫通させ、内部をあえて見せるアイデアが浮かんだ。

さらに敷地の地図を眺めていて気がついた。1955年、丹下健三先生が原爆ドームからまっすぐ軸線を引き、そこに平和記念資料館を設計したことは知られている。その軸線をさらに道に沿って延ばすと、中工場の敷地に突き当たるのだ。師が描いた軸線を私の建築で断ち切ることはできない。工場を突き抜けて海まで通さねば――。

町側からガラスの通路を通って工場を抜けると、目の前に広島湾が開ける。そこを公共の公園とした。人々は工場を通過するたび、美しい水辺を守るために巨大なフィルターが都市のごみを浄化していることを体感する。「エコリアム」と名付けたガラスのトンネルでは、SF映画に出てきそうな巨大装置を背景に映画の撮影が度々行われると最近の新聞が伝えていた。

MoMAの仕事が世界中に報道されると、外国の仕事が相次いだ。米国、第4の都市ヒューストンの「アジアソサエティ」はアジア文化の研究と交流のための施設。ナンシー・アレンさんという篤志家の女性からの依頼だ。資金調達と設計が同時に進行する難しい計画で、すべての条件が整ってから設計を始める日本とは状況が違っていた。展示室、劇場、各種の交流スペースなどがアジア文化の交流に貢献している様子を、ナンシーさんは今も毎年、私の誕生日に知らせてくれている。

丹下先生の軸線上にある「広島市中工場」（写真手前）

スイス・バーゼルの製薬会社ノバルティスのキャンパス計画は、世界的な建築賞、プリツカー賞の専務理事を務めるビル・ハーシー氏からいただいた仕事だ。私は何度かこの賞の候補に推薦され、作品の写真などを送るように依頼された。受賞は逃したが、その代わりに設計の仕事が来たのには驚いた。キャンパス計画は各国の建築家にノバルティスの工場跡地の一区画を与えて研究所を設計させるもので、私はバイオマーカーという最先端医学の研究所を設計。

どちらの仕事もやりがいがあった。しかし、ヒューストンやバーゼルを往復する機内で、私はいつしか日本での仕事に集中したいと考えるようになっていた。

（建築家）